

CITATION: Bahar-Fuchs A, Clare L, Woods B. Cognitive training and cognitive rehabilitation for mild to moderate Alzheimer's disease and vascular dementia. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2013, Issue 6. Art. No.: CD003260. DOI: 10.1002/14651858.CD003260.pub2.

CRG名: Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Group.

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 19 December 2012

Clib issue No.; N/U: 2013 Issue 6; Update

アブストラクト

背景: 認知障害、特に記憶障害はアルツハイマー病(AD)および脳血管性認知症の初期段階を特徴付けるものである。認知機能訓練および認知リハビリテーションは、記憶その他の認知機能に関する障害に対処するようにと特化した介入的アプローチである。本レビューは前回のレビューの更新版である。

目的: 本レビューの主目的は、認知症患者や主要な介護者にとって短期、中期そして長期に及ぶ重要な認知的および非認知的アウトカムに関して、軽度のアルツハイマー病あるいは脳血管性認知症患者への認知機能訓練および認知リハビリテーションの有効性や効果を評価することである。

検索戦略: MEDLINE、EMBASE、CINAHL、PsycINFO、LILACS、および他の多くの臨床試験データベースおよび灰色文献からのデータを含む、ALOISのCDCIG Specialized Registerについて、2012年11月2日に最新の検索を実施した。

選択基準: 英語で発表され、認知リハビリテーションまたは認知機能訓練による介入と対照条件とを比較し、認知症患者および/またはその家族介護者に関連するアウトカムを報告しているランダム化比較試験(RCT)を本レビューの対象とした。

データ収集と分析: 認知機能訓練による介入について報告している11件のRCTが本レビューに含められた。様々な研究で多くの指標が採用されており、目的とする11の主要および副次的アウトカムについてメタアナリシスが実施できた。いくつかのアウトカムは、いずれの研究でも評価されていなかった。メタアナリシスにおける解析の単位は、ベースライン値からの変化である。全体的な治療効果の推定値は固定効果モデルを用いて算出し、統計的不均一性は標準のカイ2乗統計量を用いて評価した。認知リハビリテーションに関するRCTが1件同定され、効果サイズについての検討は可能であったが、メタアナリシスは一つも実施できなかった。

主な結果: 認知機能訓練は、報告されたどのアウトカムに関しても正もしくは負の効果と関連していなかった。試験の質は全般的に低いか中等度であった。認知リハビリテーションに関する唯一のRCTでは、多くの被験者および介護者のアウトカムに関して有望な結果を示しており、質も概ね高かった。

レビューアの結論: 認知機能訓練に関して入手可能なエビデンスは依然として限られており、エビデンスの質も改善の必要がある。しかしながら、認知機能訓練から得られる何らかの有意な利益は未だに示されていない。試験の報告によれば、現在使用しうる標準化されたアウトカム指標では介入による利得が適切に検出されない可能性が指摘されている。認知リハビリテーションに関する1件のRCTの結果は有望であったが、予備試験的性格のものである。なお、認知機能訓練および認知リハビリテーションに関してより確実なエビデンスを得るためには、優れたデザインの研究が実施される必要がある。研究者は介入方法について現在使用できる用語を用いて適切に記述・分類すべきである。

平易な要約(Plain language summary)

軽度から中等度のアルツハイマー病および脳血管性認知症に対する認知機能訓練および認知リハビリテーション

アルツハイマー病や脳血管性疾患による認知症は公衆衛生上大変重大な問題です。現在、世界中でおよそ3,600万人が認知症を患っており、2050年までにはその数は1億1500万人を超える見通しです。この病気を軽減する有効な介入法が緊急に必要とされています。認知機能訓練および認知リハビリテーションは、初期段階の認知症患者が直面している困難に抗して、彼らの記憶力および認知機能を最大限に活用できるよう手助けするための非薬物療法です。認知機能訓練は、記憶、注意力、問題解決力など特定の認知機能をターゲットとする一連の作業を、指示に沿って行うことに主眼を置きます。認知リハビリテーションは個々のニーズとゴールを特定し、それに取り組むことに主眼を置くので、そのために新しい情報や記憶補助などの代償方法を取り入れるような戦略が必要となります。

本レビューには、11件の認知機能訓練に関する試験と1件の認知リハビリテーションに関する試験が含まれました。軽度から中等度のアルツハイマー病または脳血管性認知症患者の認知機能や心理状態、日常生活動作の改善に関して、認知機能訓練の有効性を示すエビデンスは得られませんでした。とはいえ、これらの研究の質は概ね高くありませんでした。認知リハビリテーションに関する唯一の試験からは、予備的ではあるものの、個別の認知リハビリテーションが軽度のアルツハイマー病患者の、日常生活動作の改善に有効である可能性が示されました。認知機能訓練と認知リハビリテーション療法に関して、初期段階の認知症患者に対する有効性を確立するには、より質の高い試験が必要です。

(監訳 大神 英一)

翻訳公開日:2014年 7月 23日

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。